

水戸光圀

并
川

村上元三

水戸光圀

雲と月の巻

学習研究社

書きおろし歴史小説シリーズ

定価 580円

水戸光圀

=雲と月の巻=

昭和四十六年八月二十日 初版発行

著者 村上元三

編者 日本歴史教育研究会代表

内藤誉三郎

発行者 古岡秀人

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五

郵便番号 一四五

電話 東京七二〇局一一一一

振替 東京一四二九三〇

印刷 共同印刷株式会社
製本 大日製本印刷株式会社

©1971 Printed in Japan

0393-664 517-1002

目

次

江戸城刃傷	136
諸国行脚	125
光国改名	119
新將軍	109
よき嫁	101
主と家来	92
紋太夫の顔	84
総姫	75
忠秋の死	66
頼常と綱条	58
彰考館	43
第二の子	33
春はまた	24
初鶯	15
養老の礼	7

知足院隆光	147
寒椿	154
生類あわれみの令	168
菊千代	177
船出	188
北からの便り	201
犬公方	212
名も知れぬ木	219
隠居の覚悟	228
西山	238
久昌寺談林	248
囲炉裏	259
寿蔵碑	272
楠公父子	282
楠公碑	294

対談解説 村上元三／尾崎秀樹	401
拾遺	398
義公	386
『千手』	376
江戸の空	364
紋太夫の身辺	353
玄蕃の死	344
日乗と母	332
吉孚と友千代	321
西山日月	313
佐々介三郎の旅	306

水戸光圀

雲と月の巻

装幀 栢折久美子
装画 御正 伸
挿絵 佐多芳郎

養老の礼

小石川水戸屋敷うちの庭園を、後楽園と名づけたのは、朱舜水であつた。

光国の父頼房は、寛文元年（一六六一年）、水戸にあって世を去つたが、その頼房も造園を好んでいた。寛永二年（一六二五年）、二代將軍秀忠から頼房が小石川屋敷を賜つたとき、そこに本妙寺と吉祥寺があつた。

しかし、水戸屋敷が出来るので、本妙寺は本郷丸山町に、吉祥寺は駒込に移された。

そのころの普請奉行徳大寺佐兵衛は、寺の境内に残つていた古木や池、築山などを利用し、神田上水から水を引いて、新しく池などを造つた。だが、頼房のころに、庭園は完成していなかつた。

当主の光国の代になつてからも、屋敷うちの造園に力をそそぎ、中国から招いた学問の師朱舜水も計画に参加し、入口の唐門に、舜水の筆になる後楽園

という扁額が掛けられた。

屋敷の書院をおりと、広い池があり、それをめぐつて樹木や石が配置され、石の橋二つを渡ると、舜水の扁額をかけた唐門に達する。その中が、後楽園になる。棕櫚の木が茂つた山を棕山と呼び、左にある細い滝は寢覚と名づけられてゐる。築山の一ばん高いところは白雲台、それに龍田川、駐歩泉、ほかに中国の杭州西湖になつた西湖堤などもあり、伯夷叔斉を祀つた得仁堂など、すべてに頼房と光国の眼が細かくとどいてゐた。

寛文八年の五月、四十一歳の光国は、参府中の兄松平讃岐守頼重と、その子の頼常を小石川屋敷へ招いて、後楽園で宴をひらいた。

兄をさしおいて家を継ぐ前、頼重と約束をした通り、光国は頼重の子を自分の嫡男として貰い受け、それがいま二十一歳の左衛門督綱方であつた。

光国が侍女の弥智に手をつけ、懐妊させたとき、その子は水に流せ、と家来たちに命じた。しかし、家老の中山備前守、伊藤玄蕃たちが光国には内々で、まだ在生中の頼房の許しを得、弥智に出産をさせた。生れた男子は鶴松と名づけられ、高松の頼重

の手もとで育てられた。

鶴松が兵部と名を改め、十三歳になったとき、はじめて光国は父子対面をした。そのまま兵部は、兄頼重の嫡男と定められ、右京大夫頼常となった。

頼重と光国は、それぞれ約束通り子を取りかえ、自分の後継に定めたのであった。

この寛文八年、綱方は二十一歳、頼常は十七歳だが、仲がいい。

ことに綱方は、大名の世子の中でもすぐれた美男で、父光国に伴われて登営するときなど、道の両側に若い女たちがしががんで、一目でも綱方の顔を見ようとする。

もちろん、乗物の中から綱方が顔をのぞかせるわけはない。水戸屋敷の近くに住む町家の娘が、綱方に恋わずらいをして病になり死んでしまった、という噂が出たほどであった。

綱方が登営すると、大奥の女中たちが、用もないのに中奥まで出てきて、のぞき見でもいい、綱方の顔を見ようとする。

だが綱方は、頼常をさそって、編笠で顔を隠し、馬で市中を歩いたりするが、女などには見向きもし

ない。父光国にならって、学問にはげみ、武道も熱心に修めているが、あまり身体は、丈夫ではなかった。

この年の二月、江戸に大火があり、武家二千余戸、町家百二十町も焼け、火は江戸城本丸の大奥にまで及んだ。

四代將軍家綱も、吹上の庭まで避難したほどで、桜田にある松平讃岐守頼重の上屋敷も焼けた。

ようやくこの五月、焼跡に仮普請ながら上屋敷も出来あがった。光国も、領地の常陸国から用材を送り、兄の屋敷の建て直しのために助力をした。

来月、頼重は領地の四国高松へ帰るので、今日、光国は兄とその子を、小石川屋敷へ招いたのであった。

書院の間で膳が出たあと、光国は頼重父子を庭へ案内をした。

江戸家老中山備前守信治をはじめ、水戸家の重臣たちが従っている。

光国父子も、頼重父子も羽織に袴という、くつろいだ姿で、いわば水入らずの一日であった。

ことし六十九歳になる朱舜水も、唐服をまとい、

楽しそうな表情で歩いている。

頼重から、後樂園の築山や池の名の由来などを訊かれると、いちいち舜水はあざやかな日本語で説明をした。

光国は大酒家だが、頼重はあまり酒をのまない。だが今日は、頼重は盃を三つも四つも重ねた。

「これは、九八屋と名づけてござる」

庭の北にある藁葺屋根の、田舎家造りの小屋の前まできたとき、光国は言った。

「酒というもの、星は九分ほど、夜は八分ほどに押えるほうが、明日の仕事にさしつかえがなく、酒をひさぐ店もその心得が要る、という意味でござる。さあ、中へ」

頼重父子を、光国は中へ案内をした。

土間があり、部屋には畳が敷いてあるが、すべて田舎の百姓家の造りであった。天井に太い梁、石臼、機織の道具などが置いてある。

囲炉裏が切っており、頼重と光国の父子四人は、それを囲んだ。もう火の要る時節ではないが、天井からさがっている自在鉤を、頼常はめずらしそうにさわったり、家の中を見まわしている。

綱方は、父光国に従い、二度ほど水戸へ行ったことがある。そして、領内の百姓の働きを見たり、百姓家で茶をのんだ経験もあるが、頼常には初めてであった。

朱舜水も、少しはなれたところに坐して、この若い二人の世子を楽しそうに見ている。

「頼常どのも、父上に従って高松へ戻られる、と承ったが、大名たる者、何事にても、知っておいて無益ということはござらぬ」

家来の運んできた茶をのみながら、光国は頼常に語った。

自分の実子ながら、光国は頼常を、あくまで兄頼重の嫡男として扱っている。

「大名たる者は、家来たちの助けを得て政事を執り行うべきであり、おのが一存にて一国の治政を左右しては、それはそれにて害が生ずる。大名の家に生れたる身は、身体の数倍もある重荷を背負うたるも同様ゆえ、わずかなることにも、兼ね合いというものゝが難しいのでござる」

それを頼常も綱方も、神妙に聞いていた。

「それがしは、將軍家の後見職という立場にあるゆ

え、上様に対しても、遠慮なしに意見を述べます。諸国の大名のうち、祖父や父の功名のおかげにて一城のあるじとなっている人々も多いが、それがしは、さような人々に江戸城で会うたとき、びしびしと小言を申し上げておりまする」

それを聞くと、兄の頼重は愉快そうに笑った。

「諸侯の中には、光国どのに親しみをおぼゆる人々も多い一方、うるさしと思う人々もござろうな」

「年を重ねるにつれ、それがしをうるさしと見る人、多くなりましような」

兄と顔を見合せ、光国も笑った。

その日、後楽園での宴が終り、あくる月、讃岐守頼重は帰国することになった。

父に同道することに決っていた頼常が、急に予定を変更して江戸に残ったのは、綱方が病床にいつたからであった。

水戸家の典医てんい数原宗法かずはらそうほうが診察をすると、胸の病がだいぶ進んでいるという。

十年前、妻の尋子ひろこを同じ病気で失っているだけに、光国の心痛は並大抵のものではなかった。

加えて、將軍の後見として、光国に面倒なことが

持ちあがっていた。

この年の春、江戸の大火、諸国の飢饉ききんなどが続いたので、將軍家綱いづなは、諸国へ儉約令を發布した。それも庶民の生活にまで立入って、村の祭まで派手にしてはならぬ、という一条もあり、旗本や江戸の町人の衣類についても、細かすぎる制限が加えられていた。

將軍家綱は、ことし二十八歳になる。もともと壮健なほうではないが、ご三家や老中の助けを得なくても自分で天下の政治を統すべるところまで成長した、と信じているのであろう。

大老酒井雅楽頭忠清たいうさかいようたのかみだんきよに計っただけで、家綱は光国の賛成も得ずに、儉約令を触れ出したのであった。

五月に入って、大老酒井忠清が、前もつ以て光国の都合を問うてから、小石川屋敷へ訪ねてきた。

ことし忠清は、四十五歳だが、年よりも老おけて見える。

白書院に忠清を通し、ほかの家来たちを遠退とおいけ、ひとりきりで光国は上段の間へ出て行った。

はじめは普通の挨拶をし、綱方の病氣見舞を述べたあと、忠清は形を改めた。

「上様には、こたびの儉約令につき、水戸中将様のご意見をも伺わず、行きすぎではなかったか、とご案内なされておわします。なれども、まずきびしきにすぎる触れを出し、成行を見つつ、おいおいとそれをゆるめたいと存じまする」

先代將軍家光のころから残っている老中は、阿部豊後守忠秋だけなので、いま幕閣にあって、最も権力をにぎれる立場にいるのは、この酒井忠清であつた。

今日、忠清が水戸家へ訪ねてきたのは、自分一存ではなく、將軍家綱に命ぜられたからに違いない。

家綱の正室は、伏見宮貞清親王の姫だが、いまだに子がなく、側室の中でも子を産んだものはいない。そうなると、やはり問題になるのは、將軍の継嗣であつた。

すでにご三家のうち、紀伊頼宣は和歌山の城に引きこもっているので、大老酒井忠清としては、水戸中将光国を味方にしておく必要がある。

「酒井どの」

ゆつくりと光国は、忠清の話を受けた。

「物事には、ゆとりというもの、肝要でござる。毎

日の暮しにも、同じことが申せよう。ことに政治について、物指や秤で計りたるごとき寸分の余地なき沙汰のみ下しては、民の心も畏縮いたそう。上役人の顔色のみをうかがうこととなり、ひいてはよからぬ慣いを作ることになる。こたびの儉約令は、幕府の旗本や家人の来家は、絹、紬より上等のものを着用すべからず、羽織は貯えたるものを着古すべし、などという沙汰は、將軍の名を以て触れを出すには、あまりに細かすぎよう。町々、村々の庶民の樂しみまで定めを作ること、窮屈なる政治と申すべし。その上、一国を統べる大名に、大公儀よりいちいち細かきところまで指図しては、かえって面白からぬことを招きやすい。儉約の令について、それがしも否やは申さぬが、ただあまり細かく、きびしきにわたらぬほうがよろしきか、と存ずる。そのこと、上様のお耳へ入れ、お手前にもご承知おき下さるよう、お願いいたしたい」

「心得てござります。かたじけのう存じました」

ていねいに礼を述べ、酒井忠清は、水戸屋敷を辞した。

そのあと、居間へ戻った光国のところへ、家老の

中山備前守が伺候した。

「酒井雅樂頭どの、なんの用件でござりましたな」

そう訊いた備前守へ、光国は、ちよつと眉をひそめながら言った。

「將軍家繼嗣のこと、急いだるほうがよいな。さもないと、上様が酒井忠清の意見に動かされるおそれがある」

あくる日、光国は登營をした。

將軍家綱は、風邪の氣味で中奥の寢所に臥ていたが、すぐ光国に会いたい、と言ってきた。

家綱の寢所には、光国の想像した通り、大老酒井雅樂頭忠清が控えていた。

「忠清を以てのご意見、承つてござる」

夜具の上に起き直り、礼を述べてから家綱の言い出したのは、やはり自分の繼嗣のことであつた。

「わが後繼に、都より有栖川幸仁親王をお迎え申したし、と存するが、中将どののお考え、いかがであらう」

それは家綱自身の考えではなく、酒井忠清の知恵、とわかることであつた。親王が徳川將軍の位につけば、政治については知識がないのだから、大老

たち幕閣の言うままになるのは明らかだし、忠清は先のことまで計算をしているのであらう。

だが、家綱には二人の弟がいる。甲府綱重と館林綱吉の二人で、綱重は人物が鋭く、將軍となる大器ではない、と酒井忠清は言っている。綱吉はおとなしい人物だが、綱吉のほうが忠清を嫌っていた。

「お答え申しあげまする」

と膝を進め、はつきりと光国は言った。

「ご養子のおん望みの候わば、館林綱吉どのを相立て候こと、もつとも至当と存じ申す。京都よりご養子をお迎えなさることなど、論外の沙汰。もしも、それがしの申す言葉に誤りありと思し召さば、明日より出仕は控え申すべし」

きびしい語調なので、しばらく家綱は無言でいた。酒井忠清も、黙ったままであつた。

やがて、家綱は言った。

「明日、改めてお答え申すべし。ただいまのこと、くれぐれも中将どのがお胸のうちに」

「承知仕つてござる」

光国は一礼して、寢間から退出した。

甲府綱重とくらべて、弟の館林綱吉のほうが將軍

としての器をそなえている、と見る自分の考えに誤りはない、と光国は信じていた。

それきり継嗣問題は表面に出ず、酒井忠清も光国の意見を聞こうとはしない。

綱方の病氣も、快方に向わず、あくる寛文九年になつた。

二月十六日、甲府宰相綱重の北の方が、江戸屋敷にあつて歿した。綱重は、若いころ関白二条光平の姫を北の方に迎えたが、子の出来ぬうちに先立たれ、次に権中納言俊景の姫を奥方にした。こんど歿したのは、その二番目の北の方であつた。

すでに綱重は、側室とのあいだに、九歳になる虎丸という男子がいる。この虎丸は、のち綱豊と名乗り、六代將軍となつて、名を家宣に改めた人物であつた。

光国は、日比谷門うちにある甲府綱重の屋敷へ、弔問に行った。

ことし綱重は、二十五歳、三代將軍家光の第三子に当り、母は家光の側室のお夏の方といった。

気性のはげしい一方、綱重は學問も好きだし、幕閣の中にも支持者は多い。だが、大老酒井忠清とは

不仲で、けさ忠清が弔問にきたときも、綱重は会おうとしなかつたという。

綱重と母は違うが、家光の第四子館林綱吉を見ると、ことし二十三歳の綱吉のほうが、はるかに長者の風格をそなえている。江戸城内でも、ときどき綱重は強い声で茶坊主たちを叱りつけるし、信望を得ている、とは言いにくい。

綱重と綱吉を比べて、べつに好き嫌いをするわけではないが、將軍の継嗣者として綱吉のほうが向いている、と光国は見ている。

その年の十一月十二日、光国は、朱舜水のために小石川屋敷うちで宴席を設け、儒教の式にある通り、養老の礼を行つた。舜水が、七十歳の賀を迎えたからであつた。

尾張家、紀州家はもちろん、大老酒井忠清はじめ老中たち、それに水戸家と親しい大名たちが招かれた。

大広間の上段の間に、松の鉢をかざり、唐服の朱舜水を坐らせ、光国は下段の間に坐つて、朱舜水の長寿を祝つた。

しかし、その宴もほかの大名屋敷のように豪華な

ものではなく、料理も質素であつた。

この年、水戸領内は不作で、光国は領民の租税も免じてやったし、江戸から金や米を送った。領民が不作で困っているのに、華かな宴を開いては、という光国の心づかいが、そのまま当日の養老の礼の座にあらわれている。

朱舜水は上段の間にあつて、光国から祝の言葉を受ける、こんどは自分がおきてきて光国の前に坐り、これまでの厚遇に対して礼を述べた。

この日、綱方は気分がいい、といって、きちんと月代や顔も剃り、礼装で出席した。

興が乗ってくると、光国は謡曲の『高砂』の一節を謡った。朱舜水は、その場で作つた漢詩を吟じ、なごやかで楽しい宴であつた。

光国が見ていると、綱方の眼はうるんだようになり、顔に血の色がのぼっている。あきらかに、熱がある、とわかる。

その日、客を送り出したあと、綱方は光国の前にきて祝を述べ、自分の居間へ引きとつた。

診断に行った数原宗的法眼が、そつと光国の居間へ報告にきた。

「申しあげたき儀がござりまする」

「綱方の病、進んでいるのか」

「さようでござりまする」

昼間は朱舜水のために賀宴を張り、夜は、綱方の病氣について暗い言葉を聞くとは、さすがに光国も大きな衝撃を受けた心地であつた。

「数原、そのこと、綱方の耳に入れるな」

光国の言葉を聞いて、数原法眼は顔をあげた。その眼に、きらりと泪が光っていた。

「お上」

数原法眼は、震える声で言つた。

「若君様は、おん病に打ち勝とう、となされておわします。わたくしも、そのお手伝いをいたさねばなりません」

「では、わしも望みを捨てまい」

「お願いを仕りまする」

数原法眼の言葉つきは、自分のいのちを賭けている、という感じであつた。

その日、朱舜水の賀を祝つて、水戸家中だけではなく、これまで学問を教えられていた諸大名や旗本からも、さまざまな文章が贈られた。